慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宗鳳鳴記述『趙紫陽軟禁中的談話』香港開放出版社、二〇〇七年
Sub Title	Zong Fengming, Zhao Ziyang : captive conversations
Author	林, 秀光(Lin, Xiuguang)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.1 (2008. 3) ,p.177- 181
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20080331-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

宗鳳鳴記述『趙紫陽軟禁中的談話』香港開放出版社、二〇〇七年

林　秀光

これは異色な著書である。本書においてまとめられている談話の話し手趙紫陽は、中国共産党（以下、中共）の最高指導者にあたる中共中央総書記であった[1]。趙紫陽は一九八九年の天安門事件で失脚し、一六年間にわたる自宅軟禁を余儀なくされ、外部の世界とは断絶されていた。旧友である本書の筆者は厳しい監視をくぐりぬけ「気功師」と偽って百回以上自宅訪問し、そこで行われた会話を詳細に記録した。本書は趙紫陽が軟禁された約二年後の一九九一年七月一〇日から死去する直前の二〇〇四年一〇月二四日まで、約十四年間にわたって趙紫陽の心境を記録したものである。

中共の政治文化において、パージされた高級幹部には自らが置かれた状況や経験したその時々の権力闘争を「不説不写」（話さない、書かない）という不文律がある。趙紫陽自身も自伝の執筆を勧められたが、それには積極的ではなかった。そのため、本書はわれわれにとって等身大の趙紫陽を知ることのみならず、彼が経験した天安門事件をはじめ、最高指導部層における権力闘争や政策の分岐を知る最良の書となろう。

趙紫陽は多くの談話において、共産党一党支配の理論と歴史を反省し批判した上で、中国社会における思想啓蒙と新しい観念の樹立の必要性、議会政治の導入や連邦自治などの政治改革の構想にまで言及していた。中国政治の主流にいた中共高級幹部の回顧録では、それまでの中共一党支配の失敗の歴史について反省があっても、このような大胆な政治構想が展開されることはない。一方、中共によってパージされた彭徳懐、ソ連に亡命した王明、国民党に寝返り、失意のまま香港とカナダに亡命した張国濤の著作にもこのような構想をみることはできない。

それは、趙紫陽がマルクス主義や一党支配の理論の呪縛から解放されていたことの現れであろう。晩年の趙紫陽は軟禁された状況のなかで、中国社会の現実に適応する発展の道を絶えず模索していた。趙紫陽は、マルクスが社会主義、共産主義以外の道も社会を近代化に導くことができることを予見できなかった点や、さらには、マルクスが想像した道は実践が証明したようにもはや行き詰まっていることを指摘した。したがって、マルクスが設計したモデルが通用しなくなった現在、この枠組みから脱出すべきであると、述べている。また、社会は発展する中で自己調整し前進していくものであり、なにかのイデオロギー、主義あるいは計画によって推し進めるものではないという認識を示し、中国の問題はまさにここにあると指摘した。趙紫陽はプロレタリアート独裁の学説を放棄しなければ、民主政治は実現できないであろうと、中国社会を支配してきたマルクス主義や一党支配の理論と決別している。

そして趙紫陽は常に時局に関心をもち、江沢民時代の執政、現政権の指導者胡錦濤にも厳しい批判を加えている。彼は胡錦濤が提起した中共の執政能力の強化は、依然として一党支配を強化するものであり、これでは、社会の矛盾がますます拡大し社会的な危機を深めるだけであるとの懸念を示した。

長年にわたる談話の中で、趙紫陽の共産党員としての限界も見え隠れしたが、趙紫陽は、共産党一党支配から民主的な政治体制への転換を図ることによってはじめて中国の出路があると信じていた。共産党政権からパージされ、軟禁された身であったとはいえ、本書で示された共産党の元最高指導者、共産党員でもある趙紫陽の思索は今後の中国の進むべき道を示唆しているように思う。

天安門事件後に趙紫陽関連の著書が十数冊香港で出版されている。[2] 評者はそのすべてに目を通している。関連著書の多くは趙紫陽の在職中のブレーンたちによる回顧であるが、趙紫陽が率いた経済改革と政治改革の政策過程を知る上で貴重な資料となっている。[3] しかし、趙紫陽自身が語る天安門事件の内実や上述した晩年の趙紫陽の思索を知ることができるのは本書のみである。

加えて、本書は筆者と趙紫陽の思想的な共鳴と真理の追求の産物でもある。筆者宗鳳鳴自身も青年時代に学生運動に参加し共産党員となり、趙紫陽とともに革命戦争時代を過ごしている。彼自身が述べているように、八九年の天安門事件時、反腐敗を訴えた学生に同情的で、武力鎮圧に反対した趙紫陽の主張に共鳴していた。彼は趙紫陽談話の記録者のみならず、趙紫陽と外部世界との連絡を取り持つ役割をも果たしていた。趙紫陽に最新の情報を提供し、また自らの考えを率直に話すことで、趙紫陽の評論を引き出していた。本書はまさにそうした二人の老革命家が互いに刺激しあい、真理を追求する心の道のりであった。趙紫陽の談話を羅列しただけのいかなる著書も所詮情報の寄せ集めでしかない。[4] これは筆者をおいて誰もできない仕事であった。この点においても本書はオリジナリティがあり、異色であるといえよう。

注

（1）趙紫陽は一九一九年に河南省に生まれ、一九三八年に中国共産党に入党。一九四九年中国共産党が政権掌握後、広東省共産党委員会第一書記などを歴任し、文化大革命中に失脚した。復権後、一九七五年からの五年間の四川省党委員会第一書記時代には、当時の主流に逆らって、のちに「四川経験」と呼ばれる経済改革を実施し、農家経営請負制を導入した。その結果、四川省では農業生産が飛躍的に向上し、「メシが欲しければ、趙紫陽を探せ」という言葉まで流行した。

文化大革命終了後、その経済運営の実績が評価され、鄧小平によって抜擢された。一九七九年に共産党中央委員会政治局委員に昇格し、八〇年には華国鋒の後任として国務院総理（首相）に就任した。党総書記の胡耀邦とともに鄧小平を支える「車の両輪」と称せられた。八七年一月に胡耀邦総書記の辞任を受け総書記代行に就任した。同年一一月に中共第一三期中央委員会第一回全体会議で総書記に選出された。

一九八九年五月胡耀邦の死去を機に、共産党幹部の腐敗への対策などを求めて天安門広場に集まった学生や労働者に対して、武力ではなく、対話による解決を主張したが、受け入れられず、中国共産党は戒厳令のもと、中国人民解放軍を介入させ天安門広場にいた学生と労働者に対して銃口を向けた。これが「天安門事件」（「六四事件」とも言う）である。趙紫陽は武力介入に反対したため、天安門事件直後の六月二三日に開かれた中共第一三期中央委員会第四回全体会議において、「動乱を支持し、党を分裂させた」として全役職を解任され、二〇〇五年一月一七日死去するまで自宅軟禁に置かれた。

（2）天安門事件後、中国大陸においてすべてのメディアから、趙紫陽の実名が消された。二〇〇七年七月趙紫陽の側近であった田紀雲（元国務院副総理）が執筆した「国務院大院的記憶」（『炎黄春秋』二〇〇七年第七期）のなかで、趙紫陽が浪費に反対するエピソードを紹介した。「同志」という呼称はなかったが、事件後初めて「趙紫陽」の名前が活字で登場した。

（3）呉国光、張偉国、鮑朴編著『紫陽千古――趙紫陽記念文集』香港太平洋世紀出版社、二〇〇六年：『他終於自由了

――趙紫陽逝世風雲録』大紀元網站第一手報道、二〇〇六年：陳一諮、厳家祺『趙紫陽与中国改革――記念趙紫陽』香港明鏡出版社、二〇〇五年。

楊継縄著『中国改革年代的政治闘争』香港Excellent Culture Press、二〇〇四年、付録に趙紫陽との談話を三回収録されているが、楊継縄と趙紫陽の会見は宗鳳鳴が同席しており、『趙紫陽軟禁中的談話』もその二回を収録している。宗鳳鳴著『理想・信念・追求――我的人生回顧与反思兼和趙紫陽談話的一些回憶』香港新風出版社、二〇〇四年：呉国光著『趙紫陽与政治改革』香港太平洋世紀研究所、一九九七年。

（4）理論著『専訪趙紫陽――一九九二-二〇〇四與友人的談話』香港精誠文化事業公司、二〇〇六年。この本の内容は香港の新聞「信報」で連載され、のちに「明報」にも四期連載されたが、宗鳳鳴が連載の停止を求めた。宗鳳鳴によれば、『趙紫陽軟禁中的談話』の原稿を香港で出版社を探している間に盗作され、その一部が新聞で連載され、「理論」というペンネームで出版された。現在宗鳳鳴が出版社を相手に裁判を起こしている。「趙紫陽談話録引起版権争議」http://www.epochtimes.com/b5/6/8/n1311257.htm（大紀元網、二〇〇七年一一月三日アクセス）。